



編さん便り

千葉市の明治・大正・昭和がみえる！！

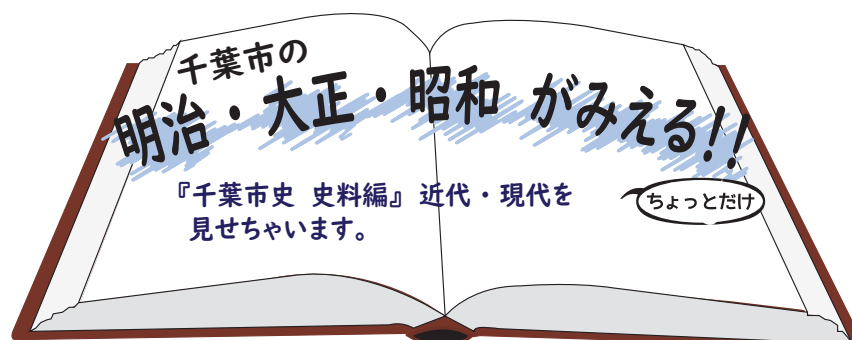
第2回 人力車の導入……………1-2

近世・近代の千葉町物語

第1回 千葉町に進出した東金町の商家 ……3

新聞にみる千葉のむかし スペイン風邪の蔓延 ……4

Chiba-shishi News Letter NO.24 2020.3



第2回 人力車の導入

千葉市史編集委員 鈴木 淳

近頃、観光地でよく見かけるようになった人力車は、明治を象徴する発明品でした。荷車に人を乗せて運ぶ営業は幕末に始まりましたが、乗客が椅子に腰かける形の車は明治3年（1870）に東京で登場します。東京では翌年の末に1万輛を越え、明治9年（1876）には2万5千輛、全国では9万輛を越えました。道路を走り回るだけに人目につきやすく、全国の人々に新時代の到来を身近に感じさせたことでしょう。これだけ急速に普及したのは乗る人、車を曳いて営業する人、車を作る人それぞれにとって手軽な新製品であったからです。維新の変革によって従来の職を失った多くの人々が人力車によって働く場を得ました（拙著『シリーズ日本の近代 新技術の社会誌』中公文庫）。



写真1 人力車のようす
（加藤博仁氏収集史料 10-78 絵はがき「県立病院」より）

陸軍がまとめた『共武政表』によれば、千葉県内には明治11年（1878）末に3,129輛の人力車が存在し、13年には4,383輛に達します。『千葉県統計書』によれば、最も多かった時期の明治29年（1896）にも4,454輛なので、急速な普及は13年までに進んだと考えられます。『共武政表』は、100人以上が集住していた地域ごとの数も示しており、現在の千葉市内については表の通りです。

表1 現在の千葉市域での人力車数（『共武政表』より）

	明治11年末	12年末	13年末
馬加村	41	46	50
検見川村	35	43	44
黒砂村			1
登戸村・寒川村字橋向	42	46	52
千葉町・寒川村	120	117	137
千葉寺村字五田保	15	11	11
今井村	6	6	12
曾我野村	18	18	21
北生実村字居廻	1	1	1
浜野村	41	51	63
古市場村	3	3	3
土気町	1	1	0
合計	323	343	395

県全体ではこの3年間に40%の増加でしたが、市内の集住地では22%の増加で、これらの地域では普及が早かったため増加のペースが落ちたのでしょうか。

東京湾内の海運のための船着き場がある寒川を含む千葉町が最多で、同様に船着き場がある浜野、登戸、馬加（幕張）、検見川、曾我野（蘇我）などに多かったことがわかります。このように、明治以降には多くの調査が行われたので、それを利用して全体的な動向を知ることができます。しかし、例えば、この調査は明治10年の西南戦争で人力車が用いられてその軍事的有用性がわかったことを背景に、軍がその存在状況を把握するため行なったもので、千葉に人力車が導入された過程を把握しようとした調査ではありません。それからわかる事には限界があります。

中央区稲荷町では、かつて五田保^{こたっぼ}と呼ばれたこの地域の貴重な史料が町有文書として大切に伝えられています。五田保は寒川の南隣の海岸沿いの集落で、小規模な河岸（港）があり、明治初年には1隻の五大力船がここを拠点に横浜、東京を結んで航海していました。

人力車に関しては「人力車持主控」という帳簿が作られ、県への人力車の届出と税金の納入が記録されています。その最初の記録は明治6年9月3日の2輦ですが、7年6月には10輦、8年6月には20輦に達しています。表でも、五田保は11年に15輦で以後は減少という特異

な動きを示していますが、人力車数のピークは東京での発明からわずか5年後の8年だったのです。五田保は多分は海運による東京との直接のつながりゆえに、人力車導入の初期の中心地の1つとなったのでしょう。

またこの史料からは、6年9月に届け出られた最初の2輦が翌月に浜野村の人に売られ、その代りか11月に千葉町の人から2輦を譲り受けたことがわかります。導入当初から需要に応じて村を越えた所有者の移動があったのでしょうか。自家用もあったかもしれませんが、町有の別の史料によれば11年末に15名が人力車営業人として納税していますので、この時点では全員が営業者でした。8年に2人、2輦目を登録する人がいますが、それ以外は1人1輦の登録で、基本的に個人営業だったようです。また、8年までに売ったり廃車にした7人は10年まで再び車を入手してはならず、転職も盛んだったことが推測されます。

このように、地域の文書からは、統計ではわからない普及が進んだ時期の動向や、その具体的な担い手を垣間見ることができます。まとめられた資料が多い時代でも、歴史の具体的なありさまを知るため、地域の文書は重要です。



写真2 「人力車持主控」 1873～78年（明治6～11）（稲荷町有文書282 表紙と史料の一部）

資料 求ム

『千葉市史』編さんのため、古い資料・昔の写真などの情報を集めています。
ご家庭で撮影されたスナップ写真も、当時の「千葉」をみることができる貴重な資料です。
いわゆる「古文書」も大歓迎です。
また、直接お話を伺うことも行いたいと考えています。戦時中の体験、幼い頃の記憶など、千葉市域に関してお話しただけの方がおられましたら、ご連絡ください。
ご提供頂いた資料、伺ったお話の内容の扱いには、十分配慮致します。
皆さまからの情報提供をお待ちしています。

第1回 千葉町に進出した東金町の商家

1 近世・近代の東金町

近世の東金町は、九十九里地域の干鰯・メ粕や上総木綿などの特産物を集荷し、江戸へ出荷する中継地であり、商業活動が盛んに行われていました。福島藩の飛地領であったものの、慶応期には藩の御用達商人を18人輩出するほど豪商も多かったようです。

近代に入っても東金町は商業都市として栄え、明治28年(1895)には東金商業組合が結成されました。また、東金町から千葉町の間は、乗合馬車が往復していました。さらに、明治33年には房総鉄道の大網－東金間が開通しました。房総鉄道は既然大網まで開通していたので、鉄道でも東金町から千葉町へ行けるようになりました。

2 千葉町に店を構える

(1) 多田屋

東金町の多田屋は、江戸時代後期に医業から転換して書肆しよよの経営を始めました。明治時代に入ると、千葉県下の教科書取り扱いの権利を取得し、明治22年(1889)には千葉町の本町三丁目に支店を開きました。多田屋は、千葉県で強い基盤を築き、多角的な経営を展開しました。

多田屋千葉支店の店主となった能勢鼎三は、明治37年(1904)に、多田屋印刷工場千葉活版所を書店の向かいに開き、出版・印刷業を始めます。千葉町に関する発行物としては、『千葉街案内』や『実測千葉市街図』など、明治時代の千葉町を知ることができるものがあります。

さらに、明治38年には多田屋支店洋物部も千葉町に開業し、千葉県庁内の共同購買組合の指定購買店となり、小中学校・幼稚園の学校帽類の特別指定も受けました。



写真1 多田屋書店(『千葉街案内』)



写真2 金物商大島屋支店(『千葉街案内』)

(2) 金物商大島屋

明治16年(1883)、東金町の金物商大島屋本店は、千葉町の通町に支店を開設しました。本店店主の佐久間七右衛門は、千葉県屈指の金物商で、明治14年の東金銀行や明治20年の東金鋳工場の設立などに携わりました。

支店の営業品目は、金物類をはじめ、建築材料、硝子板、度量衡器など種類が豊富で品質が良く、顧客が非常に多かったようです。

その他、明治時代初期に東金町で創業し、九十九里地域で木綿布を仕入れ東京に販売していた「ゲタモ」(片岡商店)は後年、千葉町の本町三丁目に呉服店、同町二丁目に洋品店を開きます。

商業都市の東金町を拠点にしていた商家は、県都千葉町に進出し、近代における千葉町の商業発展に寄与していったのでした。(市史編さん担当 土屋雅人)

スペイン風邪の蔓延

～大正7年パンデミックから何を学ぶ？～

新型コロナウイルスによる世界的なパンデミックの影響が随所に及んでいる今日この頃、本号では急遽「過去のパンデミックはどうだったのか？」について、ご紹介したいと思います。

大正7年（1918）、全世界で「スペイン風邪」が流行、日本でも8月下旬から流行がはじまり、11月には全国的な流行となりました。千葉県内も例外ではなく、東京日日新聞10月26日の記事では「怖い西班牙感冒 千葉町にも猛威を揮ふ」（写真）として記事を発表しています。これによれば、この時点で「官署に勤める役人、材料廠へ通ふ職工、旅館、下宿屋の女中さては荒くれた寒川の漁師達に至る迄皆閉口して居る、殊に蓮池七十の芸者中廿余名は休業」とし、千葉中学校では生徒24名と教師3名が罹患、女子師範学校でも6名の罹患者がでていることが書かれています。木更津駅でも駅員9名が罹患し、周辺の駅から応援を呼んで営業している状態です。「三日風邪の烈しいもの」として不摂生をしないように注意喚起がされています。

翌27日には、「人込を避けよ」という新井県警察医の談話を載せ、症状についての説明をした後に「患者はなるべく健康者と隔離」する必要を説いています。31日の「世界かぜ益蔓延 何日になつたら終熄するか」という記事では、各郡の状況を載せたうえで、県庁内で40余名、千葉中学校60名、高等女学校30名、男子師範17名、女子師範23名、千葉尋常小学校と第一～第四各小学校合わせて250名もの罹患者の増加、ならびに郵便局の集配人や電話交換手でも罹患者増加のため業務に支障がでている旨を報じており、確実に生活への影響がではじめていることがわかります。

11月4日には佐原高女が前日から一週間の休校となった旨が報じられ、6日には県下の患者数が約5万人に達する見込みであること、医師ですら罹患して診察ができない状態であるとの記事が出ています。罹患者からの死亡者（小学生）も出て、いよいよ退き引かない状態になってきました。



東京日日新聞 大正7年10月26日の記事

7日には「各所の製糸工場も遂に休業す 欠席休校日に次々」、そして千葉中学校も5日から10日までの臨時休校となったことを報じています。印旛郡当局は、各町村に対し全ての集会の中止を通達し、ますます今回のコロナウイルスと同様の様相を呈してきます。連日のように患者数や休校の情報が紙面にあがっています。その後記事は次第に減少し、28日には「やつと終熄か」の記事がでます。初発以来の県内患者数は182,541名、死亡者646名で罹患率は2.09%、死亡率は0.353%とのことでした。

全国的にも12月頃には勢いが低下、当時の内務省衛生局は、日本国内の総人口5,719万人に対し、第1回流行期間中の総患者数は2,116万8千人（約37%）と報告、総死亡者数は25万7千人で単純計算すると致死率は1.2%とのことなので、千葉県内は決して高くはない罹患率と死亡率であるとはいえ、その混乱はかなりのものであったことは想像に難くありません。

今回の新型コロナウイルスへの政府の対応は、患者との接触をさけるという観点から休校・不要不急の外出や集会を避けることに集約されると思いますが、大正7年時点でもやはり同様の対応がなされていたことがわかります。

大正7年のパンデミック同様、必ず終息する日が来ると思います。まだまだ先は不透明ですが、ひとつの希望を見出すこともできるのではないのでしょうか。

ちば市史編さんより24号をお届けします。

「千葉市の明治・大正・昭和がみえる！」第2回では、人力車の営業について、現在の千葉市域で導入され広がっていくようすや実際の担い手たちの動向を解説していただきました。

また、新たなシリーズとして、「近世・近代の千葉町物語」をスタートしました。初回となる本号では、明治期に東金町から進出してきた商店が千葉町に与えた影響について考察します。

新元号となった今年度、台風による甚大な被害、そして新型コロナウイルスによる社会全体の混乱と、大きな変化の一年となりました。後世、どのように歴史の中に描かれていくことになるでしょうか（え）

＊毎年度末刊行のニューズレターにて、次年度講座のお知らせをしておりましたが、新型コロナウイルス感染防止の関係で日程等が未定です。大変申し訳ありませんが、後日市政だより・HP等でご確認ください。

あとがき

ちば市史編さん便り 24号 Chiba-shishi News Letter No.24

発行日 2020年3月31日
編集・発行 千葉市立郷土博物館 市史編さん担当
〒260-0856 千葉市中央区亥鼻1-6-1
印刷 株式会社みつわ